

バングラデシュ南部避難民支援事業 先遣隊報告 矢野佐知子

バングラデシュではミャンマーから大量の避難民が移入し、避難民の健康状態の悪化が深刻化しています。私は先遣隊の一員として、9月16日から26日までバングラデシュで活動しました。私は以前にバングラデシュのサイクロン復興支援事業で7か月間派遣されたことがあり、バングラデシュは今回が2回目です。今回の活動では、この時にできた現地の人脈が大いに役立ちました。

今回の先遣隊の任務は、

- ①避難民の健康状態を調査し、医療支援のニーズをアセスメントする
- ②医療活動地の選定を行う

ことでした。

現地に到着後、バングラデシュ赤新月社の青少年ボランティアとともに、複数の避難民キャンプを巡回。日々増加する避難民に、支援は追いついておらず、衣食住などの基本的なニーズが充足されずに、地面に落ちた米を必死で拾う子供連れの女性もいました。また、医療支援の介入のないキャンプもあり、早急に対応する必要があると感じました。避難民の住居の多くは竹とビニールシートで作った簡易テントです。雨が降るとキャンプ内の道路は水浸しになり、テントの中まで水が入ります。舗装されていない道路がほとんどで、ぬかるみに足をとられることも何度もありました。10、11月はサイクロンの時期であり、衛生状況の悪化が懸念されるため、今後は感染症への対応もさらに重要となってきます。

バングラデシュ赤新月社の巡回診療に同行した際、小学生の子供が一人で診察に来ました。診察内容を説明するため、親について尋ねると、「父親はひどい目にあっていなくなった。母親はテントで兄弟の面倒をみている。」と淡々と答えます。無表情で話すその子を見て、医療支援と同時にこころのケアの必要性を強く感じました。

こういった状況から、日本赤十字社は医療チームの派遣を決定。国際赤十字やバングラデシュ赤新月社と協力し、すでに現地で巡回診療を開始しています。避難民の方々の状況が少しでも改善されるよう、心から願っています。

現在バングラデシュは避難民への対応のほか、洪水、サイクロン被害者への対応など、複数の救援事業を同時進行で行っています。こういった状況下で、必死で活動する現地スタッフに敬意とエールを送り、今後も状況を見守っていきたいと思っています。

(注)国際赤十字では、政治的・民族背景および避難されている方々の多様性に配慮し『ロヒンギャ』という表現を使用しないこととしています。



矢野看護師（右）と河合管理要員



キャンプ内で聞き取り調査



劣悪な環境のキャンプ



雨が降るとさらに環境は厳しくなる



キャンプからキャンプへアセスメント



配給物資を待つ大量の避難民